

魚病と養魚技術指導

中村幹雄・後藤悦郎

県内の病魚の診断、治療と養魚に関する技術の指導を行なったので報告する。

○ヤマメ、ニジマス

県東部の2経営体で3月下旬～6月上旬に稚魚の大量斃死があった。発症前の飼育尾数はそれぞれ約10万尾であったが80～90%の歩減りがあった。ウイルス検査は行なわなかったが症状は体色黒化、腹部膨満、眼球突出、鰓の著しい貧血、体表のV字あるいは線状の出血、前腎部の失色、カタル性腸炎などIHNの典型的な症状が認められた。来年にこの疾病を発生させないため、飼育魚全部を取り揚げ処分すること（1経営体は一部残存）、池、器具、種卵等の消毒、卵、稚魚の隔離、飼育などの指導を行なった。

県東部の1経営体で7月上旬～下旬にピブリオ病が発生し、5～10gのもの1,000尾が斃死した。

○アユ

東部の中間育成中のものに3月末にピブリオ病が発生、オキシリン酸を投薬したが完治せず4月中旬まで斃死が続いた。被害量は15,000尾程度。

西部の種苗生産施設に原因不明の大量斃死が起こり、飼育中の仔魚がほぼ全滅した。期間は11月下旬～1月上旬である。細菌検査を行なったがピブリオ病原菌などは発見できなかった。オキシリン酸薬浴、ワムシのニフルステレン酸ナトリウム浸漬、オキシリン酸経口投与を行なったが効果が全くなかった。被害尾数は700～800万尾に達すると思われる。

○ハマチ

東部の2経営体のモジャコに類結節症が発生した。発生時期は6月下旬～7月上旬と8月中旬～8月下旬で被害総数は約10,000尾であった。斃死、衰弱魚の徹底取り揚げとアンピシリンの経口投与で終息した。

○アワビ

西部の1種苗生産施設で4月上旬より7月の長期にわたり稚貝に斃死が続いた。サイズは10～20mmで、付着力が弱くなりシェルターより脱落し死に至る。足の裏の縁辺部が白く壊死し、貝殻に欠刻を生ずる等の症状が認められる。細菌検査を行なったが優位を占めるものは検出されず、今後、餌料、収容密度、水質等からの検討も必要である。

○コイ

数件の病気についての問い合わせ、持ち込みがあった。飼育規模は小規模であり、検査の結果寄生虫や水カビの付着であったので防除方法、飼育方法の改善等を指導した。